

少年とオッサンの幻想郷冒険記

てんしのてんこ盛り

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

目が覚めたら美少女がいて、巻物を開いたらオッサンが出てきてもおわけわかんねえ！ しかも、アリスって美少女に質問責めされてさしもの俺もタジタジだぜ：アリス曰く森で倒れてたとかあなたは妖精の魔法使いよとか言ってたがやっぱりさっぱり思い出せねえよ。

「じゃあねえ行くぞオッサン！」『何処へだ誰がだ：勘弁してくれ』

記憶喪失の妖精の少年と謎のコートのオッサンとの幻想郷冒険譚です。厨二病全開のノリと勢いで強くなる感じでいきます。戦いの中で成長する少年や明かされるオッサンの秘密（）とはいかに?!

イメージとしては、遊戯王ZEXALの九十九遊馬とアストラルのような関係だと思っただけがいいです。

会話の中に小ネタとか挟みつつ、面白おかしくかけるように頑張ります。なるべく隔週更新していきます。が、投稿されず、翌週に持ち越されることもあると思うよ。ごめんね。

目次

くエピソード そして プロログく	
アリス イン ワンダーランド	1
初弾幕戦は白黒魔女と!?	7
初弾幕ごっこ、その勝敗は…?	13
永遠の巫女	21
魔法使いの憂鬱	26
紅霧の夜に空は亡く	
おてんば氷娘の好敵手【ルーミア視点追加】	29
Re:—Remote Emotion—	32

くエピローグ　そして　プロローグ
アリス　イン　ワンダーランド

此処はとある森にある洋風の家の居間。

そこには、羽の生えた少年と人形を操るの少女がいた。

一方は髪は金髪で赤のカチューシャがよく似合う。水色を基調としたワンピースに腰回りに大きなピンクのリボン、さらに白のストールを留めるように小さなピンクのリボンが首回りにもう一つ。全体的にヒラヒラとした服装は少女の白磁のような素肌によく映える。加えて、無表情な顔から正しく人形のような美少女という印象を受ける。

その少女の双眸は静かにもう一方の少年を捉えている。

その彼はというところとあどけなさが残る幼い顔立ちに黒色の虹彩の瞳と薄紫色の髪という容姿である。だが、紺色のロングコートを羽織り、肩甲骨辺りから黒色の羽が生えている姿はただの少年というには違和感を感じる。しかし、態度は少年のように忙しないようだ。

さて、彼と彼女が話している内容はというと…

—Side Alice—

私の名前は、アリス・マーガトロイド。魔法の森に住む七色の人形遣い。

今は人里の帰りに魔法の森で倒れていた少年と話をしているところ。

見たところ妖精のようだけど巻物の形をした魔導書と思しきものに強大な魔力を持っているところを見るに魔法使いであると推測できる。言ってはなんだが、妖精は基本的に知的能力が人間の子供程度から成長しない。にも関わらず、彼は研究を生業とする魔法使いであるのだ。好奇心が疼かない訳がない。

さらに、彼の持つ巻物は根本的に私たちの使う術式とは似て非なるものであることか。通常、魔法とは師弟で相伝され、独自の進化を遂げるものだ。それはさながら木の枝の如く枝分かれしていくもの、そ

れでも必ず共通の基礎がある。それが異なるということとは、大昔に枝分かれしたものだろう。魔法を模した秘術ではないことはわかる。私がかつてアレに似た術式を見たことがある。ならこの少年は…。

「おーい、アリスー聞いてんのかー。そろそろ俺でも泣いちやうぞ！
無視、ダメ、絶対！」

少年が両腕をクロスさせて目の前を飛び跳ねている。集中しすぎて話を聞かなくなるのは私の悪癖なのか、魔法使いとしての性なのか。

「つまり、あなたは記憶喪失だと。あなたの近くに落ちていた呪われた巻物にも見覚えがないと。そういうわけね」

「さっきからそう言ってるだろ！ まあ、アリスは可愛いから許すけどな！」

彼が本気で褒めていることぐらい人と関わり合いの少ない私でもわかる。まあ、この程度でどうこう思うほどではないが、少しだけ、気づかしい。

「そ。急に質問責めにしてごめんなさいね」

少し素っ気なくしてしまった。少年相手でも恥ずかしいものは恥ずかしいものだ。

「ああ、全くだ！」

まあ、彼はそんな些末なことは気にしないでしょね。

少しの間だが、彼と話してみてもわかったことがある。彼は素直だ、感情的すぎるほどに。おおよそ、魔法使いらしからぬ性格だ。おそらく、あの巻物は彼の師が書いたものね。彼自身に巻物と同様の体系の術式がかけられていることからわかる。：双方とも解析はできそうもないが。

「ふう…わかったわ。私が気づいたことはあなたが単に自然発生した妖精ではなくおそらくは妖精の魔法使いであるということ。もつといえば、保有魔力量が異常だということね。それと、あなた自身になんらかの術式がかけられていると、いったところよ」

「何で魔法使いだとか、どんな術式だとか教えてくれねえのか？」

妖精にしては理解力はあるみたいね。素のステータスも高いみた

いだし、磨けば光るかもしれない。妖精に魔法使いの素質だなんて無駄以外の何物でもないと思わなくもないが。

「魔法使いであるかはこれから証明するわ。術式に関しては根底から微妙に私の知る基礎と異なることと高度な隠匿性から解析は無理ね」
「なんだダメじゃん。まあいいや！ で、証明って？」

「そうね、この巻物はおそらく師から弟子に伝える魔導書の一種。それも、持ち主を選ぶ所謂『呪われている』巻物。これにかけられた術式とあなたにかけられた術式が酷似していることから、あなたの魔導書のはずよ。あなたがこれを開くことができれば、その推測を証明できるとってわけ」

こんなものを作るための素材が手に入る場所なんて私の知るところじゃ一つしかないわね：久々に戻ろうかしら。

：魔道書が力を持つことはよくあることだけどやっぱり特殊ね。これは：神力？

「さっきから思ってたけどよ、紙がねえのに巻物ってそれただの筒みたいなもんじゃん。実は、アリスって：馬鹿なのか？」

こういうところは妖精らしいわね。都会派の私はこんなことで目くらまを立てないけれど。

「とにかく、側面をつまむようにしてそのまま引いてみて」

怒ってなんてないわよ。ええ、決して。

「全くアリスはバカだなく、そんなんで：ってなんか浮き出た！ オッサンも出てきたし、すげえ!!」

『ん？ここはどこだ？私は：誰だ？』

「術式を直接封じているから紙は必要ないし、劣化もしない上に検索もできるといったところね。その人はおそらくあなたの師ね、私には見えないけれど話しかけ…」

／スゲエ／＼パネエ／＼ヤベエ／「：そう」

これで証明できた：彼の師が発展させたと思しき術式が使えれば、私の目標の一助になるかもしれないわね、このままうまくいけばだけど…。

「なんかオッサンも記憶がないってきー！」

『少年、君は何か知っているか?』

ままならないものね。でも、解析は時間をかければできるでしょうし、焦る必要は…。はあ、またガラスの割れる音がしたわね。いい加減に私の家のことを配慮してくれないかしら。

「こんな時に…玄関から入りなさいって言ってるでしょ、魔理沙」

ああ、この後の展開が予測できるわ。部屋に男女が二人きりってところからとんでもない愚考を巡らせるに違いないわ。

「それはできねえ約束だぜ! で、アリスは人形じや飽き足らず、妖精にまで手を出し始めたのか?…いくら人肌恋しいからってそれはないんじゃない?」

ほら、ね。で、二言目には…。

「おつと、少年! アリスが欲しけりや私と弾幕ごっこで勝負だぜ!」

「ハア…いい? 彼女…魔理沙の言うことは真にうけちやだめよ」

彼女は、霧雨魔理沙。私と同じ森に住む普通の泥棒。黒色の三角帽子に白黒のエプロンドレスは紛う方無き『魔女』。

彼女が影の努力家であることは知っているけれども、人の家に突っ込むのはどうにかならないのかしらね…行動力という点に関しては称賛に値するけれど。

「おつ! 受けて立ってやるぜ! …で、弾幕ごっこってなんだ?」

『弾幕ごっことはどのようなものだ?』

こつちを見ないで欲しい。

「ハア…教えるから待ってなさい」

全く世話の焼ける妖精だと思う。

「おいおいアリス、さつきからため息ばかりじゃないか! そんなんじや幸せが逃げるぜ! なつ、少年! …そういや名前はなんつーんだ?」

「そうだぞアリス! ちなみに俺に名前はねえ! ついでに、記憶もねえ!」

『私にもないんだが…』

全く誰のせいだと… そういえば彼には名前がないのか。

／＼オッサンはオッサンな！／

名前は個人を示すもの。もちろん、魔術的な意味も持つ。名前はそのままその人物の個性となる。意味のある名前は人生においての標しるべとなり導しるべとなる。本当に弾幕ぶつこごっこをするなら必要なものね。そうでなくとも、幻想郷に住む妖精の中でも別格の力を持つてる…ただの妖精じゃかわいいそうでもない。

「そう、あなたの名前はここで決めましょ。どうせ必要になるものだしね」

「じゃあ、アリス！ 名付けてくれ！ アリスっていいやつだしさー！」
『少年、オッサンではなくせめてお兄さんぐらいに…』

「言い出しっぺの法則だぜ、アリス」

まあ、こうなるでしょうね。一応、人形を作るときに考えた候補はあるから…

「ライ、ライ・フローライトとかどうかしら？」

「ん？ 幻想郷風じゃないのな」

「かつこいいじゃん！ じゃあ俺はこれからライな！ 『では、私はフローライトと…』 よろしくな、アリス、魔理沙、オッサン！」

ふふっ、嬉しそうな顔、可愛いところもあるのね。男の子っぽくてボツになった名前だけど覚えておいて良かったわ、今の彼にピッタリ。

「おっし！ それじゃあ、弾幕ぶつこごっこしようぜ！ ライ！」

「その前にライには弾幕ぶつこごっこの説明する必要があるわ。説明の間は魔理沙は窓の修復してなさい」

実際に魔法を使ってみれば、記憶が蘇るキツカケになり得るかもしれないしね。

「流してくれると思ったのに、そりゃねえぜ…ところで、その魔導書とライの言ってるオッサンって誰のことだ？」

「…その説明も一緒にするわ」

「そーいや、魔法って何なんだ？」

『私はいくつか知っているぞ』

前言撤回、前提が間違っているって…。

でも、意外と物分りがいいから今回は諦めて弟子にしても悪くはないわね…。これで、記憶の回復、ひいては魔導書の解析につながるかもしれないし。

「オッサンが出来るって!」

『ああ』

…そう。

「そう」

初弾幕戦は白黒魔女と!?

少女説明中?

—Side Lie—

「んじゃあ、こいつの持つてる魔導書はとてつもなく膨大な貯蔵量を誇る歩く図書館みたいなもんか。しかも、内容はアリスにもわからないとききたもんだ」

『話が終わったみたいだぞ、ライ』

「ここは人形が多いなーつと／シヤンハイ／んお!? 喋ったよね! 今絶対喋ったよね!」

『ライ、驚掴みにすると…』

「そういうわけよ。ところでライ、さつきから思っていたのだけれども他人の大切な人形を驚掴みにするのはいただけないわよ」

目、こわっ! アリスの目こわっ!

『恐れずに素直に謝れば彼女はきつと許してくれる』

うー、わかった!

「いや、その、ごめんなさい。こいつかわいいし、喋ったし／シヤンハイ／ほら!」

「…なら、なおのこと大切に扱って欲しいのだけれど。それと、弾幕ごっこの説明ね。魔理沙は掃除と修復をしてなさい。／あく、わかった／」

おお、ほんとだ。オッサン頼りになるうー!

『悪いことをしたら、謝るのは当然だろう』

オッサンはもちろん反省もしろよと付け加えてきた。キコエナ／イキコエナ／イ

「反省したのなら次は気を付けて、大切に扱ってくれるのなら触つても構わないわ。それより弾幕ごっこのついてんだけど、これを見て頂戴」

『見たことのない紙のようだが…』

「えーつとなになに… 『命名決闘法案と読む』命名決闘法案?」

ってか、オッサン顔が近い。息がかか…らないんだった、そういや。

「そ。それが流行の弾幕ごっこの基本理念よ。それに則った上で勝敗条件をあらかじめ決闘者同士で決めるの。主に被弾か気絶で決めるのだけれど、妖怪どうしになると気絶だけっていうのもあるみたいね」

「ほお、へえ。オッサンわかりやすく三行で」

『相手を殺すな』

ケチをつけるな

勝敗は自分らで決めろ』

「なるほど！ わかった!! じゃあもうできるな！」

「待ちなさい、まだスペルカードについて詳しく話してないわ」

「うえ、なんだよく。せっかく俺のカッチョいいバトルが始まると思ったのによお」

『ここで気を抜くな、ライ。負けたくないのならな』

オッサンまで冗談きついで…だって俺の身長同じくらいの女の子だぜ。負けるわけねーってのに。

「いい？ スペルカードっていうのはあなたにもわかりやすく言うなら弾幕ごっこにおける必殺技のこと。通常弾幕とは異なって、自身の必殺技を威力を分散して代わりに数を出して弾幕とするの。その弾幕には必ず回避できる道を作る必要がある。そのためのパターンをあらかじめこのスペルカードに封じておくのよ」

そう言って人差し指と中指を突き出すと光って数枚のカードが挟まれていた。おおーかっちょえええ。

『カードというから厚紙を使うのかと思っていたが、そういうわけではないのだな』

「使用するスペルカードの枚数は示し合わせておく必要があります、全てのスペルを使いきるということは敗北を意味する。これは絶対の勝敗条件なわけ、ここまでわかった？」

オッサン！

『パターンを決めてスペルカードとする』

あらかじめ使用枚数を決める

「使い切ったら負け…だ、わかったかライ」

「あ、ああラクシヨードだな！」

「…あれ？俺まだ何も言っていなかったよな？まあいいや。」

「お、やっと終わったのか？」

「おお、綺麗になってる。すげえ、これも魔法か？」

『どうやら、窓ガラスの予備があったようだ。苦労人だなアリスは。それと、ライは思ったことが顔に出やすいから気をつけたほうがいい』

「…へーい、やっぱ口うるせーや。」

「じゃ、スペルカードを決めましょ」

「オッサン作成中？」

『いいか、お前には土金水の3つの属性がある。特に土水は相性がいいことから土水に大きく関係のある妖精なのだろうな。そしてもう一つ、私の覚えている術式は全て初級レベルであることだ。うまく立ち回らないと負けるぞ』

「オッサン使えねー。まあ弾幕つつつても数打てば当たるだろ！アリスってば魔力量が異常だーって褒めてたし。」

『いや、やはり存分に痛い目を見てくれ、私のためにも』
「だから負けねえってのに。オッサンしつげ〜ぞ。」

「閑話休題？」

「できたー！」

「俺だけの必殺技！ヌフフツ」

『制御するのは私だがな』

「俺が使うんだから、俺のでいいの！」

「おっしや！ 今日、八卦炉を調節して新魔法が使えるようになったんだ！ 弾幕はパワーだってことを見せてやるぜ!!」

「俺のパワーのほうがぜってえすげえぜ！ なんてったってすげえんだからな！」

『弾幕はパワーか…人間で歳が若いこともあるし、そこに付込むことができればあるいは勝てるかもな』

「パワーにはパワーだろ！ 卑怯な真似なんかできつかよ！」

「勝敗は気絶か被弾三発だ！ スペルカードはお互いに二枚でどうだ？」

二枚：俺が作ったのは三枚だから…。

「よし！ もちろん、いいに決まってるあ」

『まあ、こんなものだろう』

「よし、じゃあ外に出ようぜ」

—魔法の森—

鬱蒼と生い茂った湿度の高い森で、もわもわと気味の悪い霧のようなものが出ている。その正体は化物茸の放つ瘴気と呼ばれる一種の穢れである。

ただし、幻覚作用のあるこの瘴気には、魔法使いの魔力を高める作用があるとされる。

「うげえ、じめじめするう…」

『魔理沙はどこだ？』

キヨロキヨロと辺りを見回しても魔理沙は見当たらない。

「お〜い、上だよ上っ！」

声につられて上を見上げるとそこには箒に跨った魔理沙がいた。

「魔理沙、それ股痛くならねえの？」

『頼むから、自重してくれ…』

なんでだ？絶対アレいてえだろ。

「実はこれ、微妙に浮いててそんなこと気にならないんだ」

へ〜、でもやっぱ箒に乗ってるとなんか早そうだな！

『その前に、浮けるのに箒に乗る必要はなんだ？ やはりわからん』

「んなの、かつこいいからだろ！」

『あながち間違いではなさそうだな…』

「それと、勝負には勝ったらその魔導書の解析の手伝いをしてやるぜ！ 負けたらアリスをくれてやる！」

アリス：アリスが手に入ったらなにしてもらおう、う〜ん、やっぱ人形？ だったら、負けてもいいかも。だって、手伝ってくれたほうがもつと魔法が使えるようになるかもしれないし！ あれ？ でもアリスも魔法使いだっけ…。

『その話はまだ生きていたのか、というか私の解析だと?』

「やつぱ魔理沙! お前もいいやつだな! 勝っても負けても俺の方が得じゃねえか」

『:違うな、こいつはライを利用して私を読み解くための《鍵》を探そうという魂胆だ: 負けるわけにはいかないな』

「んあ? つまりどういうことだ?」

「ちなみに、私はモノ扱いになったのかしら?」

うひょろ、アリスおつかねえ。話を聞くと、すぐに無表情のまま目つきだけが鋭くなりやがった。

「まあまあいいじゃねえか」

「はあ、私もライに興味があるから今回はそれでも構わないわよ」

ん? 今なんて?

『まさか、アリスまでもか: いや、魔法使いとしては間違っていないと思うが、なぜだか彼女らに私を読ませてはダメな気がする』

オッサン独り言多いなあ。

「おいおい、まさか冗談で言ったアレ本気だったのか?」

「茶化さないでちょうだい」

うへえ、また鋭くなった。

「おお、怖い怖い。まあお互い魔法使いだもんな。欲しくても手に入らないものは、何をしてでも手に入れるのが私だぜ!」

「おお、なんかかっこいいなそれ! よし、俺も何をしてでもアリスを手に入れるぜ!」

『ないはずの胃が痛みそうだな。勘弁してくれ:。にしてもいい薬などとは言えない状況になってきたな。』

なんだよ、勝っても負けてもどっちでもいいじゃんか。オッサンもそんなにアリスが欲しいのか? ま、やんねくけどな!

「私は奪うことなんてしないわよ。それと、ライは言葉を選ぶ癖をつけなさい」

『私もそう思う』

「だーっ、もうそんなことはいいだろ。魔理沙、勝負だ!!」

「んあ? 地上でか? 普通に飛べばいいのに」

「なあオツサン普通に飛ぶつてのに違和感があるのは俺だけか？」

『心配するな、君は正常だ。だがなライ、君には魔力があり、翼もある。イメージが出来れば簡単に飛べるさ』

イメージねえ、こんな感じか？うお、飛んだ。俺飛んでる！

「待ちくたびれたぜ、さあ弾幕ごっこの開始だ!!!」

初弾幕ごっこ、その勝敗は…？

—オツサン視点—

「待ちくたびれたぜ、さあ弾幕ごっここの開始だ!!」

魔理沙の掛け声とともに弾幕が放たれた。

ふむ、随分と直情的な性格だと思っていたが弾幕にもそれが如実に表れているな。レーザーにミサイルとくると属性は光でそこに熱を加えて威力を底上げしたのか：威力的には相手を選ばない属性だな。ゆえに、一種に絞り、習熟するのは戦闘目的においては間違いではないが、やはりというかまだまだ未熟だな。

意外なのは、危なげながらもライが弾幕を避けていることか。

『ライ、相手の魔法は直線的だ。さらに言えば、こちらを妖精と侮り、油断をしている。ちょうどいい、一泡吹かせてやろう』

「つたりめえだ!」

闘争心を煽れば、私の言うことに耳を傾けてくれるはずだ。勝ちたかと思つておるときほど、人は抵抗なく助言を聞き入れる。

『ならば私の指示に従え、まずは水の弾幕を張れ!』

「水う?なんでそんな弱っちそうなのなんだ? それに俺は魔法が使えねえつうの!」

む、そうであつたな。

『ならば巻物を開き、私に続き、唱えろ!!』

「お、おう」

『第一章の記述を断章する! 詠唱破棄、術式選択、目標補足!』

『今だ! 力を流すようにして魔力を込めろ!!』

「おうさ! これが俺の全力全開!!」

『おいつ、バカが抑えろ!!』

くそつ、このままでは暴走した術式が…。

「は? へっ?」

パンツと炸裂音とともに大粒の雨が降り始める。

忘れてはいけないのは今が弾幕ごっここの最中であることだ。コントをしつつ、手元で魔法を暴発なんぞさせていけば次に起こることな

ぞ火を見るよりも明らかである。

『頓馬な奴め…』

誰がスペカでもないのに全力を込めろといった。いや、込めるなども言っではないがな、常識的に考えてくれ…。

そして、予想通りというかなんとか通常弾幕が殺到して／＼ピチューン／というなんとも小気味悪い音とともに被弾した。…どこから音が出ているんだ？

「ふふん、まずは一発だな！…にしても拍子抜けだ、ほんとに魔法使いか？ 私には弾幕すら撃てない妖精未満にしか見えないぜ」

いや、さらに油断したから良しとしよう。我ながら前向きな判断だが、スペカ以外で被弾することを考えていなかったわけではない。当初の予定とは異なるが攻め手を変えさせてもらおう。

「いてててっ、おい、白黒っ！ 弾幕ごっこで相手を殺しちやダメなんだろ!!」

加減しろよお、なんて泣き言に対して魔理沙は、

「不可抗力ってやつだ、気にすると禿げるぜ？」

ほら、こんなもん。

「ふうん、白黒ね。語呂がいいし、何より特徴を的確に短くまとめているところがいいわね。私も使おうかしら」

いつの間にか人形に傘を持たせていたアリスが思案顔になっている。ところで君は少し迷走していないか？ ええい、ここにはツッコミ役が不在なのか!?

ハア、まだ弾幕ごっこの最中だ、私がクレバーに判断しなければ。

「やっぱり妖精と戦うのは、私の性に合わないわ。魔符【スターダストレヴアリエ】」

絶対嘘だ…とはあながち言えないな。魔理沙は強い相手に固執しているきらいがある。この際、なぜ執着しているのかは関係ない。

私は、巨大な星型弾幕が殺到するのを見て、

『ここは私たちもスペルカードで応戦するぞ。この際、魔力は先ほどと同じだけ込めればいい』

ここまできると、効率的な魔力運用よりも力任せに数で圧倒したほ

うがいいと考えた結果である。予め流れてくる魔力量が分かっていると同じミスはしない。

先程から魔力を弱めつつ、と言っても馬鹿みたいに込めすぎているが、同じ魔法を手元でパンパン炸裂させているライに言う。…こいつは前を見ているのだろうか？

『おい、前を向けライ!!』

「は？ へっ?」

まただよ。

／＼ピチューン／

ああくそっ、どうして思った通りに動いてくれない。

本当のところはいい戦いを演じた上でかつ経験を積ませて勝つつもりだったが仕方がない。

「いつててて…、くっそうあと一回かあ」

『そのまま力で水弾を炸裂させていろ。勝ちたければな』

うくと唸りながらではあるが、最後の一言が効いたようで言うとおりに従ってくれる。初めから何も言わず従ってくれていればなと頭を掠めたが深くは考えないことにした。

「なんだあ？ さつきからそればかりで。さつきと終わらせて、さつきりその魔道書をもらってくからな」

おまえ、どんな教育受けたんだ。というか、いつやっていいと言った。

はあ、魔理沙だけでなくアリスまで胡乱な目でこちらを見ているからな。まあ、そろそろ事に及べそうだから別に構うことはないのだがな。

今の状況で重要なのは、いかにライと関わることが無意味で無価値であるか、偶然に見せかけて勝ちを掠め取れるかだ。…本当はもつと別の終わり方が望ましかったが仕方がないか。だがまあそうすれば、魔理沙にもアリスにも私を読み解かれずに済むだろう。ライには悪いが…な。

元々、魔理沙はアリスに新魔法とやらを見せに来たようだったからな。残機が一機この状況だと、そろそろ件の“パワーのある新魔法

“とやらが出てくるかな。”

「私にも用事があるんでな、コイツで終わらせる！恋符【マスターズパーク】」

今まで一貫して光魔法を使っていた魔理沙だったが、最後の攻撃も例に漏れず光魔法だった。

計画通りだ。普通ならば、この荒れ狂う光の奔流に飲まれて、一巻の終わりだろうが。

『今だ！ 水符を使うぞ！！ 魔力はそのまま流し続けている。：勝つぞ』

「…ああー」

そうだ、この戦いで引き分けはあっても負けなど許されるはずがない。私自身、どのような根拠で動いているかなどわからんがある種の強迫観念が私を突き動かしていることだけはわかる。

絶対に【私】を読ませてはいけない…と。

『いくぞー！第一章の記述から断章する、詠唱破棄、術式選択、目標補足』水符【アビストローム】

大抵、これだけの魔力量はまとめきれずに霧散するか、無理にまとめて爆発するかのどちらかだ。だからこそ、効率的運用が求められている。よって、魔理沙はあれだけの魔力を荒削りながらもまとめあげていることから、彼女の實力は推して測るべしである。：まあ、私はそれ以上のものを知っているがな。だが、ライは魔力量の調節すらまとみにできない。だから私はまとめずに幾千幾百の水弾に分けた。

：私たちの使うスペカは実のところただの厚紙だ。ライではパターンを封じるなんてことは不可能だし、私は思念体のようなもので会話と魔導書の制御以上の干渉できないようだからな。だがこのおかげで、臨機応変に弾幕を変化することができる。回避するための道があるのだから反則ではないと信じたい。

：例え、反則であつても勝気な彼女では初心者にケチをつけることなどできようはずがないだろうが。

さて、通常ならば私たちの前方にある弱々しい水弾では全て光に飲まれる、にも関わらず分けた。それも爆発せずにすむからなどといった後ろ向きな理由でなく勝つための布石として。

聡慧な方なら既にお気づきだろう。現にアリスは気づいているよ。うだ、何が起こり、どのような結末を迎えるかを。

『すでにチェックメイトだ』

荒れ狂う光の奔流は終ぞ私たちを飲み込むことはなかった…。

「虹…やはりこれはプリズム効果ね」

いつの間にやら、アリスは虹が見えるであろう位置まで移動していたようだ。

そう、アリスが呟いたとおりだ。大気と水における光の屈折率の差を利用した言わば対光魔法の切り札だ。さらに言えば、水が熱を奪い、その威力を下げたことも大きいだろう。下準備とライの馬鹿げた量の魔力があったからこそできたことだと言える。やはり…

『弾幕はブレインだ』

「弾幕はパワーだぜ」

『んっ?』

しかし、当の本人はそうは捉えていなかったようだ。本気である水玉で光を吹き飛ばしたと考えているのだろうか。やはり、頓馬な奴だ。次からはそう呼ぶか。

だがこれで私たちの勝ちだ。傍から見れば、自爆していたがやっこさつとコスペルカードが使えて、偶然にも光が弱まり、運良く勝つた程度にしか映らないだろう。

「あく、くっそ負けた負けた。でも楽しかったからまたやろーぜ！」

あ、最後の今度教えてくれねーかなあ？すげえかっこよかったし」

はっ?なぜ、火に油を注ぐような真似を…!

「あく、なにを勘違いしてるのかわかんねえが私の負けだぜ? スペルカードブレイクってやつだ」

そのとおりだ、むしろそれを狙って戦っていた。あそこまで酷いとそれ以外に勝つ手段などなかった。土ではあれを防ぐには力不足だし、金はそもそも金属を知らないであろうこいつに使わせることは説

明的な意味で面倒以外の何物でもないしな。せめて、基礎化学程度は修めてほしい。

なにより、こいつと相性のいい水が最良だと判断をしたからだ。

『ライ、君は思い違いを』

「だって、俺ってば光ん中にいたじゃん。これって三度目の被弾だよな？」

開いた口が塞がらないとはこのことか。

スペルカードブレイクした時よりも魔理沙が間抜けな顔をしていた。恐らくだが、私も同じようなものなのだろうな。

「そうかいそうかい、だがな私は納得してないぜ！ 今回の賭けは次回に持ち越してなわけで私は行くわ」

「そういえばあなた、何しに来たの？」

「んあ、マスパを見せることとこの紅霧について聞きに来たんだった。異変で霊夢に負けちゃいられないしな！」

「霊夢って誰さ？」

「博麗の巫女さ、気になるならついてきてもいいんだぜ。ついてこれるならな」

魔理沙が不敵に笑った気がした。その瞬間、到底人間が出せない速度で飛んでいった。

負けず嫌いだな。というか、早すぎやしないか。

「あー！ 待ってって、待って!!」

ライ：いや、トンマは翼をパタパタとさせる飛行であることを追いかける。ハッキリ言って追いつけるようなものではないと思っていたが直進した先にある森の出口で待っていてくれた。

魔理沙は泣いていたような気がしたがこちらを確認するとすぐに先に進んでいった。彼女に会ってからのことを鑑みるに弱みを人に見せるのを極端に嫌っているようだ、気丈な娘だと思う。まだ、親に甘えていた時期だろうに。

いや、人の事情にまで気をかける必要はない…か。

ん、そういえば何かを忘れているような…。あるはずなのにないように扱われている何かがあるような。

「ほらほらボサツとするなって！」

彼女の呼ぶ声で途端にどうでもよくなつた。不思議な娘だ…まるで知っている誰かのような…。

『まあいいか』

そのまま私たちはあとを追いかけて飛び出…さなかつた。

「おい、オツサン！ こいつを見てくれよ！」

『なんだ、トンマ』

「トンマってなんだよ！ ほらここ！ なんか増えてるだろ。」

『記述が増えている…しかもこれは…』

◇◇◇◇

—Side Alice—

「はあ、嵐のようだったわ」

それにしてもお礼の一つもなく飛び出していくなんてね。ま、いつでも会えるでしょ。

にしても、魔理沙ほどじゃないけど拍子抜けだったわね。まさか、あの程度の術式しか載っていないなんて。

まあもしも見込み通りだったとしても、前みたいに痛い目を見るだけね、きつと。

「嫌なこと思い出しちやつたわね」

忘れていたけど、人形の修復のために人里に糸の買い足しに行った帰りだった。早いところ直してあげないと。

…でも、あの魔導書に憑いている彼は只者ではないようね。

——考えすぎかしら？

◇◇◇◇

—Side ???—

「ふふっ、楽しそうね」

「お言葉ですが、そのような木っ端妖精を眺めているのにはどのような理由があるのでしょうか？」

「その光を和らげ、その塵に同じうす。今度こそ、彼は幸せにならなく

てはいけない。その権利がある。ついでに責任もとってもらわなければならない。貴方もそう思うでしょう、藍？」

我が主人は相変わらさず私では到底理解できないほどの考えを張り巡らせているのだろう。

「申し訳ありません。その言葉は私では推し量りかねます、紫様」

「貴方にもいずれ分かるわよ、いずれ：ね」

紫様は開いた扇子をカチリと閉じた。

「どういふことだろうか？それは私にも関係したことなのだろうか。

「あら？ そろそろ、今代に会いに行く時間だわ。用意して頂戴な」

今はこのお方にお仕えすることが最上の幸せだと確信している。

この先、何が起ころうとも私がすることなど決まっている。

「仰せのままに」

◇◇◇◇

—Side ???—

「だからあ、私見たんだってば！」

「外でお昼寝してたんだから夢でも見てたんでしょ」

「うう、スターめえ信じてないなあ」

「異変って、まだ諦めてなかったのね」

ルナまでえく

「スペルカードで妖精が魔女に勝つとこ見たの！ これは妖精の地位向上のための第一歩となるわ！」

「スペルカードでなら勝てる！」

「でき、スペルカード作ろう！」

「スペルカードでなら勝てるかあ」

「いいんじゃないの？」

ほらほら乗り気じゃない！ 光の三妖精ここにあり!! ってね

永遠の巫女

〔道中会話〕

『いいか、私は面倒が嫌いなんだ。科学の最低限の知識は得てもらおうぞ』

「エエエエエ（ハ、ハ）エエエエエ」

「ん？ライは何の話をしてるんだ」

「えーと、めんどくさいこと。つてか魔理沙は箒に乗れていいよなー」

「ああ、なんなら引っ張って行ってやろうか？」

「いや、え？ 引っ張るつて」

「そりやこういうことさ！」

「ぎやああああああ」

『これは空を飛ぶ練習も必要か…』

◇◇◇◇

—博麗神社—

幻想郷唯一の神社。しかし、神社にはいないはずの妖怪がよく確認される。さらには、道中は厳しい獣道であり、安全が確保できないため参拝客が非常に乏しい。また、外の世界の住民が結界を抜けて帰ることのできる唯一の場所でもある。

当然だが、博麗神社には巫女がいる。彼女たちは、紅白の脇の空いた巫女服に身を包み博麗の巫女と呼ばれる。幻想郷の調停者にして、人間側のバランスを担う存在。しかし、今代の巫女は少し勝手が違うように…

—霊夢視点—

私は博麗 霊夢。どこから来たのか、誰から生まれたのかすらわからない。気づいたらここにいて妖怪がいた。

妖怪から受け継いだ知識と技術で幻想郷のバランスを保つことを生業としている。人間の中で異質な存在。特に能力に目覚めてからは価値観や人生観までもが変わってしまった。人から見れば、”浮い

ている” そうだ。

それでいい、巫女なんてのは妖怪から恐れられてなんぼの存在だからね。それが人と同じじゃあ畏怖されないでしょうし。…ま、人と違うってことはそれだけで人からも忌避されるってことだけだね。

「今日も涼しいわね」

妖力でできた紅霧…か。派手好きの大妖怪による異変か、面倒なことになりそうだわ。縁側でお茶を飲む分にはちようどいいけど、私にとってはそうもいかないからね。

「ハロー、ご機嫌いかがかしら？ 霊夢」

「おかげさんで最悪よ。ああ、愉快で素敵な賽銭箱はあちらよ」

大妖怪といえばこいつがいたか、そろそろ退治すべきじゃないかしら。コイツが来たってことは異変解決の催促かしら。

所詮、妖怪と人間は相容れないもの同士だもの、コイツにとって私はただの駒、これからするのただの取るに足りないゴツコ遊び。

妖怪が生きるために人間が必要で人間が生きるために私が必要だから生かして活かして逝くまで飼い続ける。全く反吐が出る…、そのはずなのに私は何も感じない、憤懣する事柄であろうとも、静謐な自分がいる。

—感情の欠如

——これが”浮く”ということ

わかっている、だから私は今を甘んじている。

能力のおかげで今までを捨てることができたもの。

そう、例えこいつに何かされていようとも私は…

「はいはい／＼チャリン／＼分かっていると思うけど、解決よろしくね」

賽銭の音で思考の海から抜け出した。しかたないじゃない、お金はいくらあっても困らないもの。

「もうすぐ夜になるけどね」

「あら、夜の境内って素敵よ」

「あんたたちから見ればね」

「んもう、もつと情趣を解するといいわ」

「お生憎様、信仰とお金以外は間に合ってるわ」

早く帰ってくれないかな、面倒くさくてたまないわ。

「そうそう、今回はスペルカードを持っているいくことをおすすすめするわ」
「私と紫で作ったパターン作りごっこのこと？ 確かに知性のある妖怪や妖精の中では流行っているみたいだけど異変にまで使うと思う？」

「弾幕ごっこは異変を起こしやすくするためのものよ？ わざわざ無駄に派手な紅霧まで出しているのがいい証拠よ」

「お祭り騒ぎがしたいだけってこと？ はあ、そのために駆り出される私の身にもなってほしいわ」

「巫女を気にかける妖怪なんてどこの世界にいるのか知りたいわ」

「あら、私は誰と話してたっけ」

「ふふっ、残念、一本取られちゃったわ」

そう言つて、紫はスキマと呼ばれる空間の境界に潜り込んでいった。

いつになっても悪趣味ね、あのスキマ。特にリボンがあるあたりが。

◆◆◆

私が縁側でお茶をすすっていると、某白黒魔女が妖精を引っ張って飛んできた。：自然の化身である妖精に魔力があるのはわかるけど、神力があるのは解せないわね。

「霧雨宅急便が来たぜ！」

そう言つて妖精を放り投げる。いや、頼んでもないし頼まれてもないのだけど。そんなこと考えていると、妖精は顔を石畳に擦りつけながら、こちらに滑ってくる。

思わず、陰陽玉で打ち返しちやったわ。

「相変わらず、ここの巫女はろくでもねえな」

「それ、あんたが言う？」

「ハハッ、それもそうか。っと吹き飛んだライを回収しないとな」

今回の異変解決は私のほうが早いぜなどと言いながら飛び去っていった。よくもまあ飽きずにやれるものだとある種の感心の念を抱く。加えて、馬鹿なことをしているとも思う。異変解決をするということはそれだけで声高に人間ではないと言っているようなものなのに。

あいつの心配をするだけ無駄か、私に張り合って何の得があるのやら。

まあいいか。

そういえば先ほど飛んでったあの不思議な妖精はライというらしい。普段なら興味もわからない存在だけれど、なぜか惹きつけられた。なぜだろうと考えてみても思い当たる節などなく。

「ま、どうでもいいか」

こうなるのも当然の帰結ね。

◇◇◇

もうすぐ夜ね。紫が言った通り夜に出るのは癪に障るけど、魔理沙に先を越されるのも癪に障るのよねえ。ハア、なんだかんだ言いつつも心配するのは、きつと、私にとっていい悪友だからかしらね。

そんなことを考えていると本殿から物音がした。気配からおそらく…

「ふわあ、懐かしい気配がいると思っただが気のせいかい？」

やっぱり。欠伸をしているこいつは魅魔、博麗神社の崇り神で魔理沙の師匠の悪霊。

「さあ？きつきまで紫がいたわ、それじゃないかしら」

「違う違う、もつと懐かしい感じだよ」

「じゃあ魔理沙ね、さつき異変解決がてら寄ってたし」

「異変？ああ通りで力が湧いてくるわけだ」

悪霊の力が湧くなんて迷惑以外の何物でもないけどね。

「それで、夜だけど行かなくていいのかい？」

「毎回昼に出てるからね、夜まで待ってたのよ」

まあ、妖精を連れている魔理沙にならいつでも追いつけるし、急須のお茶を飲み干すまでここにいたからなんだけどね。夜になると冷えるからね、熱いお茶で温めておかないと。

「そうかい、じゃ、あたしや寝てるよ」

そのまま永眠しときなさい。って、もう悪霊だっけ。

◇◇◇◇

急須が空になったし、ふうとため息をついて、

「さて、私もそろそろ行きますか」

そして、私はまた異変解決に出る。

これからも、きつと、いつもどおり。

少女祈禱中？

—紫視点—

「行ったわね」

これで私たちにとってのエピローグ・彼らにとってのプロローグはおしまい。

「これから、幻想郷は変わるわ」

私すら巻き込んで、貴方が望んだものへと。

「変えてくれるんでしょう、ねえ…■■」

魔法使いの憂鬱

幻想郷には箒に跨り、空を駆ける人間の魔法使いがいる。家族を捨ててまで魔導に身を捧げた彼女が固い信念を持っていることは自明である。しかしなぜ、彼女は人間と妖怪のどっちつかずな状況であり続けるのだろうか。人間が完全な魔法使いになるには捨食の法と呼ばれる食事の代わりに魔力を吸収する術と捨虫の法と呼ばれる不老になる術を取得する必要がある。

彼女は非才の身でありながら、人を大きく超える力を持つ。その気になれば、死ぬまでに努力で身に付けることができるだろう。しかし、不老に興味のある素振りを見せるだけで一向に研究し、身に付けようとはしない。

なにやら彼女は人間として成し遂げたいことがあるようで…

— 魔理沙視点 —

「くそっ！」

声に出したことで少しだけ…ほんの少しだけ落ち着いた。

「異変のせいかわ妖怪が多いな…」

見かけた妖精は片っ端から撃ち落した。これから親玉と戦うかもしれないっていうのに無駄撃ちなんてしてられない。…でも、それでも撃たずにはいられなかった。

「くそっ、チクシヨウ！」

通常弾幕で妖精を撃ち落しているだけに拘らず魔力の減りを感じた。分かっている、これが普通の魔法使いにんげんの限界だってことを。

悔しくて、悔しくて、やりきれない思いが募っていく。

あいつ——ライを一目見たとき『こいつは妖精のくせに素質の塊だ』って思った。アリスもそれを見抜いているようだった。だから、茶化したとき満更でもなかったのだろう。…もちろん、魔導書に興味があったのは間違いない。けど、ライに興味を持っていることも同じくらい間違いなかったんだ。

嫉妬した…んだと思う。非才の自分が堪らなく情けなかった。そ

れで不意に、天才に勝ちたいって思つて弾幕勝負を仕掛けちまつた。

『んあ？ 地上でか？普通に飛べばいいのに』

—才能がある妖精なのに飛べないのか？

『私には弾幕すら撃てない妖精未満にしか見えないぜ』

—私より魔力があるのに、飛ぶことだけじゃなくて弾幕すらも撃てないのかよ…。

『さつくりその魔道書をもらつてくからな』

—いくら才能があつたつて使いこなせないなら宝の持ち腐れだよな！

『私にも用事があるんでな』

微塵も負けることを考えていなかった私はあの程度のことすら気づかなかつた。舐めてたのはどつちだよって話だよな。ははっ、こんなんじや霊夢に合わせる顔がねえや。

「ハアハア…ははっ」

私はそこで止まつて息を整えた。すると、乾いた声が出た。

霊夢以外に負けたくなかつた—そんな風にあのときの私は思った。
：私は昔つから霊夢に負けっぱなしだ、いつの間にか負け癖がついてたんだらうな。

私は強くなろうと努力した。なんでだつたっけな…ああそうだ、勝ちたかつたんだ、霊夢に。それでやつと私は対等な親友になれる。

だけど、今のあいつは私を見て、どうして私に拘るの？ とかふざけたことをぬかすんだらうよ。

昔のあいつのおかげで私は独りぼっちじゃなくなった。それなのに、今やあいつが独りぼっちだ。

私が、私がそんなままだからあいつは”浮いた”ままなんだ。

『今回の異変解決は私のほうが早いぜ!』

今回はわざわざ寄り道してまで宣戦布告した。

今はなぜか、無性に霊夢に勝ちたかった。

でも、今の霊夢はそんなこと眼中に無い。

『あく、くっそ負けた負けた。でも楽しかったからまたやろーぜ!』

全力で戦って全力で笑う。今の霊夢の眼中に私がないなら振り向かせるだけだ! 手始めに、異変解決で戦って、宴会でも開いてやる!!

「思いついたら、即実行っ! だぜ!」

私の目標は人間のうちに霊夢に何度も勝つことだ! お前がお茶を啜ってる間にここまで強くなったぜ! どうだ見たかってな。この異変で私がいるってこと嫌になるまで分かせてやる!!

「ははっ、これでこそ私だ」

うん、今度は自然と笑えた気がする。永い間忘れてた未来に思いを馳せて。

そして、私はまた空を駆ける。

これからは、きつと、変わっていく。

私を変えたあの底なしの馬鹿ライのせいだな!

紅霧の夜に空は亡く

おてんば氷娘の好敵手【ルーミア視点追加】

〔道中会話〕

「なあオツサン」

『なんだ？』

「俺たちどこまで飛ぶんだろうな」

『大丈夫だ、問題ない』

「問題大有りじゃねえか?!」

『湖が見えてきたな…ちようどいい、体を水で覆い飛び込め』

「えーと、第一章の記述を断章する！ 詠唱破棄、術式選択、目標補足

…だっけ？」

『そうだ、あとは魔力を込めてくれ。私になんとかする』

「よし、こうだな！」

『相変わらず多いが…まあいい、余剰分は水球として放出しておくか』

◆◆◆◆

—霧の湖—

妖怪の山の麓にある湖。一周するのに半刻ほどかかるほどの大きさを持つ。昼間には霧が出やすく、妖精や妖怪が水場を求めて現れることが少なくない。そのような、妖精に悪戯されやすく、妖怪に襲われやすい場所ではあるが、新月の夜に怪物級の大型魚がごく稀に釣れるので釣りをする人が後を絶たない。

ちなみに、妖怪の山から水が流れ込んでおり、稀に文字通りの河童の川流れを見れる。とてもかわいい。

妖精とは自然の具現である。つまり、ここにも棲みつく妖精がいる。彼女は薄めの水色の髪で、ふわふわのウエーヴがかかったセミショートヘアーに青い瞳を持つ氷精である。服装は白のシャツの上に青いワンピースを着用し、頭部に青い大きなリボンと首元に赤い小

さなりボンを身に着けている。

活発そうである見た目とは裏腹にやけにつまらなさそうな顔をしている。なにやら気に入らないことがあったようで…

—Side Cirno—

あたいはチルノ！ 最近まで他の子と弹幕ごっこして遊んでたんだけど、みんなあたいのこと避けるようになってしまった。友達の大ちゃんに弹幕を撃つても怒鳴ってくるばっか。でも面白くない。友達なら遊んでくれたっていいのに…。

そんな感じで、独りで今日は湖で蛙探しをしてるんだけど大きな水が飛んできて…あれって弹幕？ いや、妖精が中に入ってこっちに飛んできてみたいだし…そうね、あたいと弹幕ごっこがしたいのね！「あたいはチルノ。この湖に棲む最強のようせ…きやああああ」

先に撃ってくるなんて卑怯な奴ね！ あんたが入ってる一番大きなの凍らせてやる！

「凍符【パーフェクトフリーズ】!!」

「がぼぼ…」

ふふん、どんなもんよ！ ってあれ、氷球が落ちてきて…

「きやああああ」

／ピチューン／

◇◇◇◇

「うーん」

頭が痛いわ。ああ、一回休みになったんだっけ。ええと、水球を撃たれて、凍らしたら、一番大きな水球の中にいた妖精が凍ったままが落ちてきて…

「あっ—!!」

思い出したわ！ あたいに弹幕ごっこで勝てる妖精がいるなんてね！

「絶対、次は勝つてやるんだから！」

「うるっさいわねえ」

出たわね！ 紅白巫女！

「あたいはチルノ。この湖に棲む最強のようせ…」

「夢符【封魔陣】」

「きやああああ」

あ、これあたいたい知ってるわ！ デジャヴってやつね！ また、賢く
なっってしまったわね。

／ピチューン／

◇◇◇◇

「うーん」

あれ、さつきもこんなことあったような…妖精と弾幕ごっこして負
けて、紅白巫女にも負けて…つてあれ？ あたいつてば最強の妖精
じゃなくなったの？ だって、あたいは最強で、でも負けて最強じゃ
なくなっただけど、最強で…あれ？

頭が痛いわ…。

「あいつに勝てばきつと解るわ、次にあったときはきつとただじゃお
かないからね！」

そのためには強いやつと戦わないといけないわ。妖精より強いや
つね…あつ、そういえば異変のときに巫女が妖精をたくさん落として
るって大ちゃんが言ってたわね。

「つて、あー！ 待てー、巫女待てー!!」

きつと、あつちね！ 妖精と戦ってるやつを片っ端から落としてや
るわ！

「絶対、負けたりしないんだから！」

◇◇◇◇

—Side ???—

「うう〜」

痛いのだく、食べていいのか聞いただけなのに。巫女はやっぱり怖
いのだ。

…やつぱり？ あれ？ でも、巫女つて髪が薄紫じゃなかったのか
？ それになんだか…

—ねえ…

「あなたはだあれ？」

Re:—Remote Emotion—

〔道中会話〕

「そーいや、ライは能力を持ってたりすんのか？」

「へ？ えーと、水を操る能力…とか？」

「河童みてえだな。能力名は自己申告制だからよ、考えておいた方がいいぜ！ 固有な能力があると箔が付くしな」

「はく？」

「ああ、そっちの方がカッコいいだろ？」

「おお、確かに！」

『……』

◇◇◇◇

—紅魔館—

霧の湖の畔に建つ、紅く窓が少ない洋館である。その色合いが存在感を一層引き立てている。また、日の光を遮る複雑な構造に、真夜中にしか鳴らない鐘つきの時計塔から主はひどく太陽を嫌っているようだ…。

もし、ここに近づきたい人間がいるなら注意してほしい。ここにはかつて紅龍と呼ばれた強者がいるのだから…。

—Side ???—

夢を見ている…。直感的にそう理解できる夢だ。そこには幼い私と彼がいる。…もう私の背は彼より高い。

今日も私は門を背にして居眠る、彼に出会うために。
ノイズにまみれた記憶は次々と場面を転換していく。

『君の名前は？』

私は首を振る。今にしてみれば、振り返りにした妖怪の名前を聞くなどと考えられないものだ。私は彼を食べようとしたのだから。

『そうか、ではその唐紅の髪と鈴を転がすように軽やかな声から…紅美鈴というのはどうだい？』

訳がわからないという印象だった。なぜ私のことを見知った人のように親く話す？ このとき幼子に向けるような期待や不安の…そ

の上、親しい子を見るような視線を向けられ混乱していた。私は人間を食べる。幼いながらも立場が逆転するときがくるかもしれないことを理解していた。そして、今がその時だと思った。私の頭の中に疑問符でいっぱいだった。混乱で立ちすくむ私を見かねて彼はこう言った。

『ついでこないのかい？ 衣食住ぐらいは保障しよう。人間以外でね』

そこからだ、彼―名前はジョンスミスだとか：今にしてみればどう考えても偽名だが―とのたつた1年間程度の旅が始まったのは。それから、うらぶれた服装から見たこともないような服装に着替え、毎日のように学問や武芸を修めるべく努力した。私はその中で人の文化に触れた：正確には彼曰くだが。太極拳やチャイナ服だなんてこの時代にあるはずもないのに…。

ノイズ、転換。

彼は本当に訳が分からなかった。

誰よりも強かった。その実、誰よりも弱かった。それは、他を一切寄せ付けない魔法―私には魔法は肌に合わなかったが―を扱うが、精神は人のいい人間そのものだった。力あるのに不釣り合い。あるとき私にとつて、その甘さが滑稽に思え、尋ねた。すると彼は答えた。

『徳は孤ならず必ず隣あり。一人は嫌なもんでね。運命というのは、向こうからは会いにきてくれないものだ。私が言うのもなんだがね』
そのとき彼は何かを諦めたような悲哀に満ちた顔をしていた。そういうえば、彼もお嬢様と同じく運命という言葉をよく使う。そして決まって自らを皮肉る。

『そうだ、私の尊敬する師も君と同じ髪色をしていてね。それに、服装まで深紅に染めていたよ』

このとき私は、もしかしてそれだけの理由で拾ったのかと思った。いや、拾われたことは嬉しかった。けどなんだか釈然としなかった。

『彼女は私の存在とこの忌々しい力に意味を与えてくれたんだ』

彼は笑っていた。力とはどういったものなのか、どのような人だっ

たのか、聞くことはできなかつた。なぜならその瞳に憎むような、蔑むような負の感情と少しの郷愁の念が込められていたから…。

また、ノイズ。

これは…最後の場面か。穏やかな湖の畔での話だ。

妖怪は精神に付随して身体が成長するけど、1年で随分と立派になったものだと思概深い。

『さて、君は強くなった。そこでだ、私はここで君と道を別とうと思。君が望むのならもう一度、道が交えるよう呪いをかけよう』

また会えるのに呪いだとか。この彼への執着が呪いなのかもしれない…。

『そう、運命へのちよつとした反抗さ』

またこれだ。運命とか自分だけが解るように話す。こういうところはお嬢様と同じだなとちよつと微笑ましく思う。…いや、お嬢様の場合は自覚が…ダメだ、悪寒がするから考えるのはやめよう。

『覚悟はできているみたいだね。じゃあ、ね。』

これが本当に最後。

気づくと私はざわつく森の中でただただ呆然と立ち尽くしていた。

手の中には龍のエンブレム。

それからは世界を逍遙していた。彼が約束を破るはずがないと信じて。だが終ぞ見つかることはなかつた。

私の旅の終着点は彼の名前が西洋風であったことと魔法使いだということと西洋に向かったときだ。余談だが西洋については旅の途中で知ったことだ。

時代錯誤にもほどがある彼は時間遡行者であるという説明以外に納得できる説がない。でも、今ここに彼はいない。嫌な予想が脳裏を掠める。嫌だ。そんなことはない。そんなはずがない。

…私はずっともつと深くまで眠りの底へと沈んでいく。彼に出会うために。

もしも彼がここにいればきつと妹様も…。